
「東方」 風

きゅうう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「東方」 風

【コード】

N0967R

【作者名】

きゅつう

【あらすじ】

霊夢の取材に来た文は一日密着。だが霊夢がいないことをいいように。白黒も一部出演！ どうぞどうぞ

(前書き)

第二作目です。前回より少し長めですが内容はまだまだです。

今回は文はと霊夢で書いてみました。でわでわどぞ読んでいただきありがとうございます^^

こんな感じできています(笑)

なので次は東方かオリジナルどちらをかくか迷っています

下手ですが一回オリジナルを書くとおもいます

であ今回はこの辺でー^^

「はいはいーい、やってきました射命丸文の一日密着取材！」
博麗神社の目の前、首からかけたカメラを持ち、頭にはオレンジの少しとがった帽子をかぶり、背中には鳥のように黒い翼が生えており、足には長いヒールのようなものがついており身長が高く見える、天狗が高らかと手をあげてポーズをとっていた。

射命丸文である。

「はいはい、どいたどいた」

抜けた声で言ったのは博霊神社の主、自称楽園の素敵な巫女博麗霊夢であった。

「おとつと、朝は掃除ですか？」

「パシャリ」と自前のカメラで掃除をしている霊夢を撮る。

「てかなんなの？朝から何か用？」

「え？だから言ったじゃないですか、一日取材って」

「はあ、仕事の邪魔よ」

正直どうでもいい感じで霊夢は流す。サツサツと掃き掃除をすませ神社の中に入ってしまふ。

「あーあ、まあこんなに簡単に引き下がらないですからね」
文は不敵な笑みを浮かべて、

「れーむさー！ーん！取材受けてくれないなられーむさんの今朝のあられもない写真を魔理沙さんに大公開しちゃいますよー！！！」
博霊神社の中「がシャンごしゃん」と食器が一気に割れるような音がした。その音がして2秒しないうちに、

「あーやー？」

霊夢が超こわもての顔をして二人の鼻と鼻が触れるくらいまで顔を近づけ、

「今朝つて、何時ごろかしら？」

顔を引きつりながら霊夢が問いたです。

「えーとですね、早朝4時13分ですね」

ニコニコして文は答える。その答えに対して霊夢は拳を握り締め、歯を食いしばりさらに問う。

「文は今日いつから取材していたのかしら??」

「0:00からです」

即答。

「あつ、ちなみに1時37分に霊夢さんが魔理沙さんの
言いかけた時、霊夢の拳は振り下ろされた。」

が、

文は仮にも天狗、俊敏さでわ霊夢を上回るため拳をひよいと避け

霊夢の後ろに回り込み、

「魔理沙さんにはらされたくなかったら取材させてくださいね？」

霊夢は肩を落とし、「仕方ないわね」と小声で小さくつぶやいた。

「ん」

「何よ??」

「なんだか」

「ん??」

「暇人なんですな」

文の一言に霊夢は拍子抜けする。取材を初めて(0:00)から約12時間、文は霊夢の横に張り付き写真を撮りまくっていた。だ

がその写真のほとんどが「お茶を飲む霊夢」「おせんべいを食べる霊夢」「寝転がっている霊夢」「お餅を食べる霊夢」とだらだらして朝の掃除を見なかつたらただの二トにしか見えないかもしれないとも思える。

「毎日こんな生活を？」

霊夢は答えに若干惑う。なんせ言ってしまう毎日常んな生活をしているのだから。だが霊夢は世間にこんな生活をしているとは思われたくないと思い、

「そんなことないわよ、いつもは…、えっと
「思いつかない。」

「あつ！大丈夫ですよ霊夢さんのこんな生活は幻想郷内の誰もが知ってますから今更隠さなくても」

満面の笑みで文が言う。霊夢は正直わかっていた事をそのまま言われて、まさに心を打ち抜かれたように（ダメージな意味で）砕けた。

「あれ？私になにかNGな事言いましたか？」

けるっとした顔で四つんばいで下を向いた霊夢の顔を覗き込む。

そして、

「もういいわよ、自由に取材して」

軽く半泣きの霊夢を横に、

「してますよ？」

当たり前のように文が答える。

そうして霊夢が買い物にでると言って、文は何故かその買い物に同行しなかった。普通なら何を買うのか、どれくらい買うのかを取材するのが目的だと思うのが普通。だが霊夢が神社をでて数分して文は、

「やってきましたよこの時間が、今日のメインイベントの時間に入りますよー」

文は考えていたのだ。密着取材と言いつたにかく霊夢の横に張り付きうざがられる。だが出かけるということになり文はいったん霊夢

から離れることによって霊夢は解放されるため文を家に残そうが抵抗はない、しかしこれらのはこの時間のためであった。

「今日の本当のテーマはこちらです！」

文字がでかかど書いてあるフリップ的なものをだした。そこには、

『博麗霊夢の家！隅々までチェックしちゃうぞ大作戦！！！！』

大作戦の意味がよくわからないが、霊夢が帰ってくるまでおよそ30分。文はとにかくあさり倒した。

縁の下から天井裏までとにかく何かあるのかを隅々メモを取った。

「さーてお賽銭箱の中はと？」

もちろん空。

「まあ誰もが知ってることか。よし、次行こう！」

流すようにスルーして、最後に……。

「来た」

最後にたどりついた場所は寝室。いままで急いで取材したからかここがいつも霊夢が寝ている場所だからかわからないが文は「ハアハア」と息が荒い。生唾を飲み込んだ文は、

「霊夢さんの霊夢さんの　　霊夢さん！」

霊夢の布団にダイブした。

純粋に霊夢Loveなのだっただ。

ダイブした直後、居間と寝室の襖が横にスライドした。

「霊夢いるか？」

白黒の奴だった。

「あ、ごめん、また来るわ」

その後文は霊夢が帰ってくる前に取材を終え顔を真っ赤にして山

へ帰って行った。その取材内容は新聞にはならず幻想郷の誰もが霊
夢家の隅々を知ることにはなかった。

ただ一つ、白黒の奴は知りたくないことを知ってしまったのであ
った。

(後書き)

読んでいただきありがとうございます^^

こんな感じできています(笑)

なので次は東方かオリジナルどちらをかくか迷っています

下手ですが一回オリジナルを書くとおもいます

であれ今回はこの辺でー^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0967r/>

「東方」 風

2011年10月8日18時11分発行